



## 九 天狗の雛になった？

---

「この階段を登って行くんですか？」

直人はゴールの見えない階段の下にいた。周りにはランパン、ランシャツのランナーたちが、肩を回したり、屈伸したり、アキレス腱を伸ばしたりしている。

「ああ。そうだ。ゴールまで七六五段あるぞ」荒木も肩を回し、首を上下、左右に傾け、準備に余念がない。

「七六五段ですか？」

学校の階段は一階から二階まで二十二段、四階までで六十六段。その十倍以上だ。ゴールできるのか。不安からか、直人の額に皺がよる。

「心配するな。そのために、墓地の階段で練習をしてきたんだからな」峰山で練習した墓地の階段は百六十段あった。それを十回登る練習をしてきた。単純に言えば、千六百段だ。七六五段はその半分だ。荒木先輩の言うように、確かにたいしたことはない。だが、連続して登るのと細切れで、休憩しながら登るのとは体への負担は違う。それに、今日は大会だ。練習のようなわけにはいかない。

「大丈夫。なんとかなる」荒木先輩の口癖が出た。この言葉に何度騙されたことか。一番最初が部活への勧誘だ。直人が入るとも入らないとも言わないのに、いきなり山に連れていかれた。だが、そのおかげで、直人は、陸上や山岳、トレイルランができるクロススポーツ部で、ユニークな先輩方に囲まれて、楽しい？高校生活を送っている。いいこともある。はずだ。いや。ないか。

「ほら、周りを見ろ。若い奴らだけじゃないぞ。年寄りも女性もいるぞ」直人の不安を察してか、荒木先輩が励ましてくれる。だが、この年寄りが曲者だ。年寄りだと言って、あなどってはいけない。こうした大会に参加する年寄りは、ラン歴数十年のつわものたちばかりだ。数多くの大会に参加し、様々な経験を積んでいる。だから、いかなる状況にも対応できる力を持っている。直人のような素人ではない。

「はあ」顔が顎から落ちるぐらい力なく返事する直人。

「ほら。これを着ろ」荒木から渡されたのは黄色いTシャツ。荒木先輩のトレードマークの黄色だ。

「何ですか、これ」

「この大会の参加賞で、これを着て走るのが条件なんだ」

「へえ。はでですね」Tシャツを袋から取り出す。Tシャツには大会名とマスコットキャラクターの絵が描かれていた。普段は、青や白のTシャツしか着ないから、目にカラシを塗りつけられたようで、着ることに少し躊躇する。

「何を遠慮しているんだ。それを着用しないと大会に参加できないぞ」と荒木先輩の言葉と同時に

「参加者の皆さま。お渡しした黄色いTシャツを着て大会に参加してください。なお、更衣室がありますので、そこで着替えてください」とアナウンスが聞こえてきた。

「ほら」荒木先輩が目で促す。直人は慌ててトイレに駆け込んだ。白いTシャツを脱ぎ、黄色Tシャツを被る。トイレの中では、直人と同じように参加者が黄色いTシャツに着替えている。黄色は目立つ色だけど、こうして参加者全員が黄色だと、個人は埋没してしまい、誰が誰だかわからなくなる。

「ただ今から、開会式を始めます。参加者の皆様は、広場にお集まりください」

直人はトイレを出た。広場は、顔なじみの参加者たちが挨拶を交わし合い、おしゃべりと黄色いTシャツで、まさしくカナリア軍団だ。でも、その軍団の中で、黄色い帽子が頭ひとつ分抜き出していた。荒木先輩の帽子だ。黄色い海の中の黄色い灯台だ。直人はその灯台を目印に荒木先輩に近づいて行った。

開会式が終わり、いよいよスタートだ。高校生や年寄り、親子など、参加者たちが道路に次々と並ぶ。普段は観光客が通る道だが、今日はランナーが占拠している。観光客は体をできるだけかがめて一列になって道路の端を縫って歩いている。

「さあ、先頭に並ぶぞ」荒木先輩は他のランナーを気にせず、そこのけそこのけ荒木が通ると言わんばかりに、堂々と前に進んでいく。だが、直人にはそんな度胸はないし、体の大きさもない。「すみません。すみません」と声を掛けながら、ランナーとランナーの隙間をすり抜けていく。だが、自分よりも大きな背中に圧倒されて、もう、前に進めなくなった。荒木先輩は既に一番前の列に並んでいる。これ以上前には進めない。荒木先輩とは五列ぐらい離れている。まあ、いいや。あきらめかけた時。

「荒木君。直人君。どこ？」若い女性の声だ。前の大きな背中が振り向いた。隙間が空いた。「いた、いた。そんなどこにいたの？」後ろから全身ピンクの女性が参加選手の間隙から現れた。中山先輩だ。「いまのうちよ」直人の横に並ぶと耳元に囁く。

「ちょっとごめんなさいね」黄色ならぬピンクの声に反応して男性ランナーたちは間を空ける。中山先輩が前に進んでいっても男性ランナーたちは誰も文句は言わない。直人も中山先輩に便乗して後ろをついていく。こぼんぎめ走法だ。見る見るうちに、するすると抜けて、中山先輩は前からそこにいたかのように荒木先輩の横に並んだ。直人は荒木先輩の後ろに並んだ。

「僕、先頭の列だなんて。そんな実力はないですよ」折角、中山先輩のおかげで、先頭近くに来たものの尻込みする直人。

「何、言っているんだ。実力がないから先頭に立つんだ。心配しなくてもすぐに抜かれる。実力のない奴が後ろにいたら、先頭とよけいに差がつくぞ」

「はあ」荒木先輩の言うことはもつともだ。だが、先頭だけでなく、二列目、三列目のランナーたちも、見るからに早そうだ。実力がないようには見えない。荒木先輩や中山先輩ならば、匹敵するかもしれないが、どう見てもひ弱な直人では、レベルじゃなく、ラベルが違う。

「一分前」スピーカーから合図の音がした。体が緊張する。「三十秒前」参加者たちは腕時計に目をやったり、顔やふとももを手でパチパチと叩いている。気合を入れているんだ。前を見た。荒木先輩は無表情だ。いつもの通りだ。緊張している様子はない。その横を見る。中山先輩はひまわり笑顔のままだ。

そうだ。突然、思い出した。目が大きく、色白の中山先輩は、フランス人形に見える。フランス

人形だなんて、今は、どこの家にも飾っていないけれど、父方の祖母の家には、ガラスケースの中に、ピンクのドレスを着た人形が置いていた。

「おばあちゃん。その人形何？」直人は祖母に尋ねたことがある。「ああ、これかい。フランス人形だよ」「フランス人形？」「そうだよ。フランス人形だよ」

「何で、フランス人形なの？ここ、日本だよ」「さあ、なんでかな。昔、おばあちゃんが若かった頃、フランス人形を飾ることが流行っていたのよ。でも、今では、どこの家にも飾っていないだろうけどね」

「へえ、そうなんだ」直人はフランス人形をガラス越しにじっくりと見た。そのフランス人形に中山先輩は似ている。初めて会った時から、何かに似ているなど思っていた。今、この大会のスタートの瞬間に思い出すのも変な話だ。人間の記憶って、どこでどう繋がっているのだろうか。本当に不思議だ。フランス人形を飾るくらいに不思議だ。

「スタート」号令が鳴った。直人が頭の中でフランス人形の顔と中山先輩の顔を重ね合わせているうちに、参加者たちは走り出した。後ろから押されるようにして、慌てて直人も走り出す。先頭集団は猛ダッシュだ。階段は七百六十五段。最初からこんなスピードで飛ばしても大丈夫なのか。それに、この大会は昨年から、順位をつけず、タイムも計らず、小さい子供からお年寄りまで、家族連れでも参加できる要項に変更している。それなのに、何で、こんなに一生懸命走るのであるか。それも顔を歪めてまで。何が目的なのだろうか。本当にランナーは自分も含めて不思議な存在だ。

はあ、はあ、はあ。口から大きく息を吸い、大きく吐く。心臓がバクバクで、鼻からだけでは空気が十分吸えないからだ。まるで、栗林公園の鯉が水面でエサを求めて口を空けているかのようだ。もちろん、直人にとっては酸素がエサだ。一段、一段。また、一段。とにかく目の前の階段を上ることだけに集中する。見えないゴールを見上げてやる気がなくなるだけだからだ。

多くの人々がたまっている。最後の登りの階段の踊り場だ。ようやくここまで辿り着いた、ゴールは目の前だ。だが、ここからが実は正念場なのだ。コース中で、一番こう配が急で、階段の幅も狭い。階段数は百段。他のランナーたちは登りの手前の踊り場で、ふとものを叩いたり、大きく深呼吸したりして最後の難所に挑もうとしている。直人の脚もくたくただ。

「かいだん、ごえええー」誰かが吠えている。叫んでいる。いや、歌っている。中山先輩の声だ。姿は見えないけれど、声だけが聞こえて来た。ラストスパートをかけ、最後の階段を登りきったのだ。中山先輩は、いつもゴール前で、叫ぶ、いや、歌うのが癖だ。それも、いつも、石川さゆりの「天城越え」のサビの部分の歌詞を変えて歌う。自分で自分を鼓舞しているのだ。

負けられない。直人も中山先輩を真似る。だけど、先輩のように周りに聞こえるようには歌えない。恥ずかしいからだ。口の中で歌う。ひとり言じゃなくひとり歌だ。「かいだん一、ごえー」でやっと十段を登れた。まだ、九十段ある。「かいだん一、ごえー」また十段登る。一息つく。残り八十段。「かいだん一、ごえー」これを後八回繰り返した。一段上がるごとに、平らな石畳、ランナーたちの脚、神社の賽銭箱、本殿が見えてくる。映画「地獄の黙示録」で兵士が泥沼から顔を出した時のようにだんだんと風景が広がってきた。

「ごえー」やっと最後の一段を登り切った。声はがらがらだ。体はバラバラだ。直人はそのまま

石畳に座り込んだ。

直人は疲れ果てながらスタート地点に戻って来た。登りは心臓が破裂しそうだったが、下りは膝やふとももなど、脚が破壊されそうだった。ゴール後、脚を引きずるようにして、先輩たちを探す。

「あら。早かったじゃない」悪気がない上から声の山中先輩。だが、その横には、かなり前を走っていたはずの荒木先輩はいなかった。

「そうなのよ。荒木君がいないのよ。クールダウンでどこかに走りに行っているのかしら」中山先輩が辺りを見回しているけれど、荒木先輩の姿は見えない。間もなく、荒木先輩が疲れを知らないようなスピードでスタート地点に戻ってきた。

「ほら。ご褒美だ」

荒木先輩から手渡されたのは、お守りだった。お守りなら、高校受験の時に、両親や祖父母から、家の近所の伏石神社をはじめ、大宰府天満宮、北野天満宮など、有名な神社仏閣の合格祈願のお守りを一ダースほど貰い、家の勉強机の前に飾っていた。勉強の合間には、気分転換を兼ねて眺め、手を合わせて合格を祈ったことが懐かしい。でも、合格発表以来、そのお守りたちは見ていない。多分、勉強机のどこかの引き出しの中に埋もれているのだろう。喉元過ぎれば熱さを忘れるじゃないけれど、冷たいものだ。直人はそんな自分を少し反省する。

「何のお守りですか」

「普通のお守りじゃないんだ。俺たちにぴったりのお守りだ」

そのお守りには大天狗と烏天狗がデザインされていた。荒木先輩は本殿まで到着した後、更に、本殿までと同じくらいの距離のある奥社まで走っていき、このお守りを購入したらしい。

「折角、ここまで来たんだ。奥社まで行かないともったいないだろう。それに、このお守りは奥社でないと売っていないんだ。このお守りに願いをかければ、俺たちもいつかは天狗になれるだろう。いや、なれるはずだ。なるんだ」

荒木先輩はそのお守りを自分の首からぶらさげた。

「階段越えの歌だけじゃなく、天狗のお守りも加われば、鬼に金棒、じゃなく、天狗に健脚ね。荒木君、ありがとう」と、中山先輩は無邪気に喜んでいる。

「ありがとうございます」

直人も礼を言って、荒木先輩と同じように、お守りを自分の首からぶらさげた。ほぼ同じ時間で、倍の距離を走る荒木先輩。お守りにお願いすることよりも、自分の脚力をもっと鍛えることの方が先だと直人はその思いを心の中に強く刻んだ。

帰りは、参加賞の無料入浴券でホテルの温泉で汗を流し、腹ごなしにうどんを食べる。電車に乗ると、疲れからか、枕木の音が子守唄に聞こえ出した。うとうとしていると自分が降りる駅がマイクから流れるのが聞こえ、慌てて飛び起きて、まだゆりかごの中の先輩たちに別れを告げて、電車を降りた。

電車の中ではあれほど気持ちよかったのにもかかわらず、プラットホームの降り立つと脚に痛みが湧いて来た。疲れで、脚の痛みさえも忘れていたのだ。足を引きずりながら、まだまだ天狗の雛にも成りきれていないことを自覚し、荒木先輩がくれたお守りを強く握り締める直人であった

